OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	椎間板ヘルニア症候群の成因に関する研究
Author(s)	小野, 啓郎
Citation	大阪大学, 1960, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/28294
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【 4 】

氏名・(本籍)	小野啓郎（おの けいろう）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 126 号
学位授与の日付	昭和35年7月4日
学位授与の要件	医学研究科外科系 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**椎間板ヘルニア症候群の成因に関する研究**
論文審査委員	(主査) 教授 久留 勝　(副査) 教授 吉井直三郎　教授 立入 弘

論文内容の要旨

研究目的

根性坐骨神経痛の原因の主たるものが椎間板ヘルニアであると証明されたのは既に古いが，疼痛以外の種々の特徴的な症状，即ち，臨床上椎間板ヘルニア症候群と呼ばれるものの成因に就いては，病理解剖学的研究によっても尚一致した見解に達していない。

特定の神経根圧迫のみで典型的な症状を惹起するという考え方には多分に疑を持たれている。

そこで，新しい補助診断法を応用して，脊椎管内病変，神経根障害を鋭敏にとらえ，臨床面から成因の解明に志した。

研究方法

臨床的に椎間板ヘルニア症の診断をつけ，観血的並びに非観血的治療をうけたもの60例につき

1. 臨床症状及び神経学的諸徴候を精査し，治療経過を観察する。
2. 全症例に於て神経根障害の有無及び程度を吟味し，椎間板ヘルニア症候群と呼ばれるものの由来を，特に神経根との関係に於て検討する。この際臨床的には知覚異常，腱反射異常等の神経的学徴候より神経根障害を判定し，尚誘発筋電図を利用して神経根の圧迫障害を知る。
3. 椎間板脱出時に於ける脊髄硬膜外腔の変化を察知するために，内椎骨静脈造影法を応用し，リコール所見とも併せて，神経根障害以外の発症要因を検討する。

研究結果

1. 臨床的には，症候群を根性症状と非根性症状に分けることが出来る。
2. 根性症状と考えられるものは，単純に神経根圧迫のみによって生起するものではない。この意味で，成因を圧迫障害とする従来の見解は完全なものと云えぬし，それに基く合目的論的な「症状の説明」も正しくない。

3. 成因として重要な神経根の過敏化乃至神経根炎の原因に脊髄硬膜外腔に於ける炎症性変化の波及があげられる。

4. 硬膜外腔に於ける炎症性変化の由来は明らかでないが，直接・間接に非根性症状及び根性症状の原因として症候群の特徴を形作る主役をなすものと考える。

総　　括

椎間板ヘルニア症に於ける激しい放散痛や特異的な症状は，脊椎管内良性腫瘍の場合と著しく趣きを異にしており，解明されなければならない幾多の問題を含んでいる。

著者は，手術時観察され，組織学的に検索報告されている，神経根並びにその周辺の炎症性病変をとりあげて，臨床的には，これが症候群の成因として重要な事を明らかにした。

論文の審査結果の要旨

日常，医家の遭遇する坐骨神経痛のかなりの%が椎間板脱出に基因することは，現今，定説となっている。しかし脱出自体はつねに神経痛をひきおこすものではない。一般に，単一神経根の圧迫が疼痛を初め複雑な症候群の原因をなすものと考える人が多いが，疼痛自体の発現機序については必ずしも見解の一致をみていない。この病態生理の解明は腰痛を伴う疾患一般の理解に資する所が大きいであろう。小野は，一方動物実験を行うと共に，60例の椎間板ヘルニア患者を対象として神経根障害の問題を再検討し，H反射波閾値を指標すると誘発筋電図学の検索から，本症に於ける根障害が圧迫自体によるよりも，はるかに重篤であることを明らかにし，更に内椎骨静脈像の検討より脊椎管内の循環障害，或いは炎症性病変こそ，根性並びに非根性症状をひきおこす最も重要な因子であることを明らかにした。

本研究は椎間板ヘルニア症に対する保存的療法の根拠と，その限界とをある程度明らかにした点で価値が少くないが，この研究に用いられた誘発筋電図並びに内椎骨静脈造影法は今後この方面の診断に大きな寄与を与えるものと期待される。